

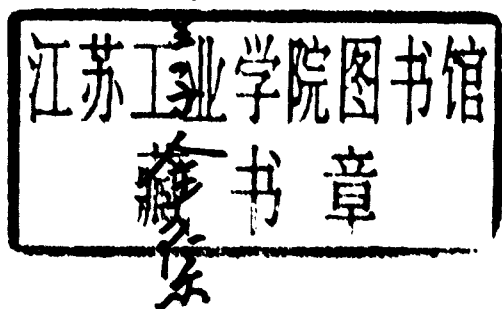
鄂上清子金鑑

第Ⅱ期

第九卷

日記 9

茅上序



第Ⅱ期

茅九卷

岩波書店

野上彌生子全集
第II期 第九卷

第十三回配本
(全二十六卷)

一九八七年二月六日 発行

定価四〇〇〇円

著者 野^の上^{がみ}彌^や生^え子^こ

発行者 緑川 亨

発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋二五
株式会社 岩波書店

電話 〇三六五二四二
振替 東京六三三〇

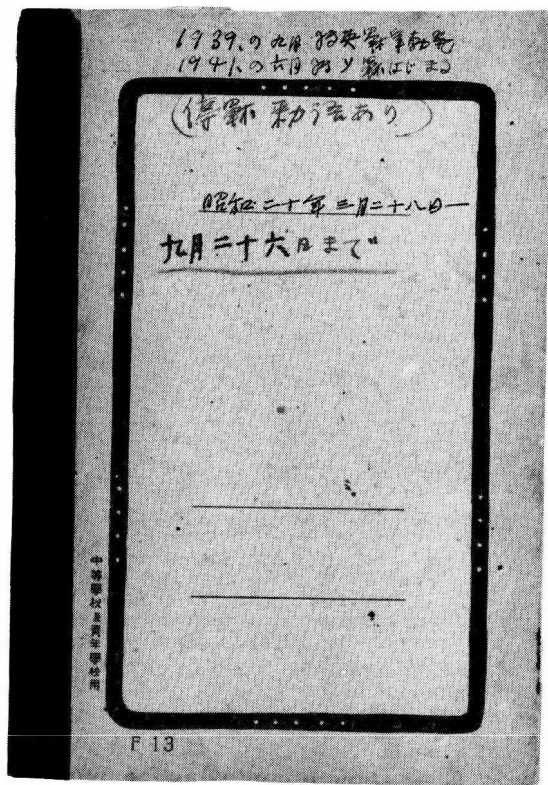
印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

日
記
九

目 次

昭和二十年三月二十八日	一
昭和二十一年	二六
昭和二十二年	三九
後記	五九



1939. の九月 独英戦争勃発
 1941. の六月 独ソ戦はじまる
 (停戦勅語あり)

昭和二十年三月二十八日——
 九月二十六日まで

昭和二十年三月二十八日 水 晴

朝滝三郎、畑のこと。前の鉄塔の下をよくセイリすれば、青物はここで十分であらう。市河のデニス・コートの方へはジャガイモ類、トナナスなどを蒔くことにすればよい。山内夫人より手紙、「ケイスウ」の北軽ソカイは、『ギケン』との交渉が不調で中止らしく、その為山荘の方も不要といつて来た。残念千万なれど、「南紀」を使用したらと思ひつき、午後寺沢さんあてに打電する。一つはモキの為もあると思ふところで、このソカイをどうか都合よく実行させ度い。こんな私的な願望がなく、これほど熱心になるだらうか？ 人間の気もちはおかしなものだ。これは単に浅間しいといひ捨てられない。平塚さんと北軽で出逢ひ一緒に帰る。彼女は正月に来た時、帰りに風邪をひき、それから胃ケイレンを煩ひ、一と月ほど寐こんでゐたとの事で、まだ疲労が著しく目だつ。そのせゐか、従来の精気が抜けて、すっかり人間まで変つたやうに感じられる。夜殆んど出掛けて来ないところも、すっかり變つてゐる。こんな風に年はとり度くない。年をとるほど寛大に、寡欲で、おちつき、善行を積み、みんなを愛し、親しんで行くやうにし度い。中々むつかしい事ではあるが。父さんからはハガキ。ウスキから米とともに玉子も五十ついた由、藤田さんにもことづけたから、どつさりストックが出来たわけで、大ゼイタクといふべし。琉球諸島のうちで、沖縄本島のすぐまへの三つの小さい島に敵はあらたに上陸した。いよ／＼九州は風前の燈火となつた。モキをなんとかして今のうち脱出させ度い。最悪の場合は、正子、子供は山の叔母さんの家へ行けるだらうが、モキたちが研究室から立ちあがらなければならぬとすれば……九大総長の荒川氏が先頃やめて、

百武大將が代つた時、ヘンな事をすると思へたが、今になつて見ると、その入れ替の意味は明々白白々である。北軽から歸つて見ると、おハギ三つ桜間からとどいてゐた。今朝久しぶりに〇〇〇が鳴つた。B 29は百三十機九州北部に來た由、上陸のケンセイであつたらしい。おもてに飛行場を狙つたとの事故、福岡市内は無事であつたらうが、大分地区にもちよいちよい侵入、佐伯に投弾した事が新聞に出てゐる。ウスキ湾が軍港などに役立たないのは、こんな場合には幸運であるが、しかしこの湾から入れば、仲須賀は早速目標になるだらう。岩波さんが終に貴族院入りにセイコウ。

三月二十九日 木 晴夜雨

ハガキ、寺沢氏、父さん、山内夫人、『ケイスウ』ソカイの件 これと入れ違ひに父さんからのハガキ着。それによると移転は技研の中の「計数」で、寺沢さんの方ではないらしい。それだと私が寺沢氏宅宛に通信したのはマヅかつたのではないかと少し気になるが、山内夫人の手紙にはたしかに麻生の「計数」とあつた。すれば寺沢さんの所長といふ事になるが。すでに父さんから南紀の建物について建畠家に手紙をだしたとの事故、デンボウで勧めた事では方針一致である。まあ今になつては仕方がない——どちらにしろ——静観する事にしよう。午後室をあけ、ジャガイモのわるくなつたのをざつと拭りだす。大して多くはない。あとは小一俵はあるだらう。宮崎の方からの追加が来れば、新イモの時までどうにかツナゲルだらう。桜間の細君ちよつと。明日午前平塚さんにつれて行く約束をする。ゴールドスミスの「ヴィカー・ウェクフィールド」こんなものをみんなよみ返して見るのもわるくはない。古風なものだ。父さんの一枚のハガキには小林啓氏へあげるお祝ひの

小謡があつた。白毛染のクスリは父さんが来る時もつて来る由

三月三十日 金 晴夜雨

夜雨の音をきいたが、おきて窓をあけると、前庭がしつとりとなつて、枯草のいろまでなんとなく艶をおびて来た。夜雨がふつて、明けるとともに晴れるのは、東京の春先きも同様であるが、ここでも同じ順序で次第に春になると見える。まだ桜間夫人が見えないうち平塚さん来訪。コタツに坐りこんでゐるうちに桜間夫人が来たので、小母さんは一と足先きに帰る。そのあとまた桜間夫人にも一と足先きに行つて貰ひ、私は山本に新聞とりに行つてから廻る。山本山荘では岩田夫人に逢ふ。ずつとまへのポンプで家がこわされたのである。山荘の方はまだ水が出ないので、当分山本の方へゐること。大分のひとだから、東南海岸のカンサイキ侵入について、なにかニュースはなにかきいて見る。侵入の前日に母親なるひとから手紙で、大分へのソカイをすすめて来た由、そこが戦場に一変するのだから、日本人は身をおくところもない有様になりさうだ。父さんからの今日の手紙に、安達が月末帰白とのこと。小手川のソカイの手伝ひが主なるもの、その話でウスキもポンプされたとのこと。小手川の工場ではないらしいが、場所のところは不明。衣類などは九重にソカイ、人間は大分近くにきめてゐるらしいが、それは愚だといふことを安達に話したとのこと。全く大分附近はウスキよりずつと危険性が多い。飛行場といふものがあるのだから、岩田夫人の話を、飛行場は柳ヶ浦、大分ふきんではタカジョウ（高城）ウ、それから佐伯。——とにかく今度は臼杵の家も浮沈の運命にさらされるわけである。私も二三日まへに金次郎に手紙で敵上陸に備へての支度を委しく

書いてやつたことであつたが。——九州は宮崎の海岸からあがるらしいと考へられてゐる。そこから北上するとすれば、ウスキは通過の途中になる。海岸ぞひの路からのぼるのを、あの日豊線の狭い山の谷あひを利用して阻むとすれば、あの一帯がもつともセイサンな戦場になるのである。もし四月二十五日の期限にロシアが友好条約を破棄すれば、今までは無事な北の方も同じ危険にさらされるだらう。人出入りが少し多くなつた為か、少し疲れをかんずる。平塚さんから帰り、ソカイ会の勧誘文を書きあげ、また平塚さんに行つて、明日安東氏に渡すことをたのむ。谷川夫人から手紙。山荘に俊太郎ちゃんと来さうな事が書いてある。態度がちつとも決定的でない。しかしこれもなりゆきに任せよう。氣をもんでもどうにもならない。平塚さんにゐる時古川さんからオコワ一皿とどく。それを食べて帰らうとしてゐると、またおだんごが来る。女中がもつて来たとのこと。これを数箇貰つて帰る。こんなにまでして一箇の生命を守らうとするのと、虫けらか雑草のやうに平氣にそれを蹂躪するのと、なんといふ相違であらう。かうまでして守らうとしても守りえずして亡くなつたと思へば、アキラメもつくわけだ。

三月三十一日 土 晴

昨夜もまたしづかな雨で、今朝もしつとりと紅茶つぼく濡れた前庭を横ぎり、カケスがとぶ。彼らの啼く音も今朝は一段にぎやかになり、その他の小鳥——キヨウ、キヨウとなくのや、ビンズイらしいのや春告げ鳥がたのしげに囀りたてる。今朝は終にストローヴを焚かなかつた。小林啓氏から超長文の手紙とどく。れいの白毛染のクスリの事もある。

四月一日 日 晴

安東氏の事務所はいつも来客でごたついてゐるので、今日は早朝平塚さんと出掛ける約束になり、誘つて途中まで来ると、黒準の来るのに出逢ふ。荷物をときに来たのである。それで私だけになる。事務所はもう人がいつぱいである。安東は食料物資の点では否定的である。約束すると、後で困まるといふ気持であるらしい。ある程度には行くとは思ふ。秋南に行くと、オヤヂ一人ぼつんとしてゐた。子供たちは沓掛の技研の炊事婦になつた母親に引きとられたさうな。かみさんは三原行きとのこと。玉子 30。技研が日本鋼管から借りてゐて、今は使つてゐない志田養狐場の建物も、「計数」に利用されさうである。間数など書いて貰つて来る。

琉球本島への侵攻が徐々に迫まつてゐるらしい。事務所にゐるうち珍しく耀三からの手紙を受けとる。六月上旬には、父さんも三枝子も、歩いてでも北軽に来させる、と書いてある。この頃を東京附近の上陸期と推定してゐるらしい。それにつけても、三枝の衣類ソカイの手おくれが残念である。どうにかするといつてゐるが。――夜平塚さん。五日の常会のために茶飲み茶碗をもつて来てくれたのである。こんな世話是她女だけが出来る。しかし十時をまだ過ぎないのに、しきりに欠伸をもらしたりする。今日の荷ほどきのカントクの疲れであるが、それにしても、今までの彼女には決してこんな事はなかつた。その中の椅子やテーブルを見て、車力の者共が、こんなものは規則違反のゼイタク物だと、おそろしくランボウにとり扱つた話をする。今にある階級の間人がそんな風にやられる時が来るのだらう。

四月二日 月 晴

朝山本老婦人、二日分の新聞をもつて来て、孫たち大勢おしかけ、今後女中は貸されまいとのこと。結構と返事する。桜間の女中のツルを使つてくれと申出されてゐるので、その方がこちらでも都合がよい。今朝も早速風呂たきに来て、台所など拭きさうぢした。ひどくチビなので、十五六でもあるかと私は考へてゐたのに、年をきいたら十八とのこと。それなら一人まへに働けるわけである。貰らひ湯は桜間の細君と末の娘と、ツルだけ。サラリは東京では二十五円やつてゐた。モラヒやうたひ会などの時の手当て三十円にはなつてゐたが、こちらへ来ることになつてから、家族同様のアシラヒをする事にして、小使ひ錢として十五円やるのみとのこと。今時そんなヤスイ女中が使へるのはおどろくべき事である。私からはまへの雪ちゃんと同じく来た時一円渡し、おヒルをたべさせて帰す約束をして、今日も早速五十錢札二枚細君にことづける。滝三郎が来て、便所を汲みださうとしたが、中の方はまだコチ／＼凍てついてゐるとのこと、ショベルで上の方だけこさぎとつてくれる。それを前庭の片傍の落葉のやまの中に入れる。畑作りの場合の堆肥である。彼は方々から畑のことその事の用事で引つ張りだのだが、うちの畑のはきつと作つてくれるらしい。こんな事も後になつて遁げこんで来たものではまにあはない。焼酎一杯に金三円やる。たき子さんからハガキ、山荘は貸すにしても、彼らが遁げこむやうな危期に備へてこそみんな借りるのに、彼女の考へ方はよつほどかつた——、彼らが遁げこむやうな危期に備へてこそみんな借りるのに、彼女の考へ方はよつほどどうかしてゐる。どちらにしても、「計数」の移転がどうなるか、早く決定しないでは困まる。北村

さんにセリを貰ふ。下の流れにもう出て、みんな摘みに行くらしい。久しぶり——全く何ヶ月ぶりに新鮮な青いものを口にする。玉子とちに一部を使ひ、あとはまだ水に浸してある。

四月三日 火 晴夜雨

はじめて山バトの鳴くのを耳にする。その他の小鳥もだん／＼鳴く音を増して来た。今朝金太郎氏帰京するので、昨日細君が入浴に来た時手紙をことづけたが、今朝は谷川夫人からのハガキを示し度く、なほモキ転任のことを積極的にさせ度いと思ひ、もう一通書いて、門のまへの路ばたに、石でとめて置いておく。坂下からのぼつて来れば、そこを通るのだから。さつき伴ちゃんを連れた金太郎が、たしかに路上のものを受けたつたと落葉松の木立越しに、路から窓に向つて声をかけて通りすぎた。北軽だからこそ、こんなノンキな通信法がとれる。父さんからハガキ。白杵から伊都子来信により仲須賀の工場が田中といつしよに機銃掃射を受けたが、屋根をやられた程度であつたとのこと。艦載のグラマンである。これくらゐで今後もすめばよいが。——道郎は七高に復校。それにつき移動証明書を送つてくれといつて来た。これはちよつと困つた。六月にはどうせ上京する伊都子のと取り変へることが出来れば好都合であるが。少くとも米の配給をすでに受けてしまつてゐる六月まででも。午後桜間さんからヌタ一皿到来。丁度御飯を炊いて上出来にできてをり、ヒルうどんや平塚さんに貰つたおしるこでおナカもそれほど空いてゐないので、晩はそれに牛肉とコブのつくだ煮ですまし、お茶漬を最後にたべる。こんなものが食べたいほど暖かいのである。小宮山氏からも、タクワンが存外早く送れるだらうといつて来た。これも調法するだらう。

昨日から Three men in a boat をよんでゐるが、浦瀬氏のヘンに碎いた、品格のないホンヤクが興味をそぐこと夥しい。ロンドンの若い青年たる三人のものが、まるでその辺のヨタのやうな人間になつてゐる。どんなに打ちとけ、のんきに、ランボオに行動しても、品格はちゃんと保たせられるわけだが、ホンヤク者の感性によつて、書物はどんなにも歪められることは今更ながらおそろしい。もとのホンヤクの方が却つてよかつた位だ。新聞を桜間連が山本にとりに行つてくれたが、昨日のも今日のもまだとつて来てゐないとのこと。琉球のその後の様子も知りたし、一つは早い夕食のおナカごなしに藤田さんまで「毎日」を借りに行く。今帰つたばかりといふ息子が出て来て、ここでも入手されなかつた。藤田さんも帰京したとのこと。もう黄昏の色が深い中を、かうして出歩くのが快いくらゐる暖かいのである。メリンスの派手の方の袷をツクロヒ終。またどうにか着られるやうになつた。

今日はお母さまの祥月命日であつたのを、忘れてゐた。相すまぬ事であつた。

四月四日 水 小雨

冷たい小雨がいつのまにか雪になる。先達てからの暖さはほんとうでなかつたわけだ。父さんから三十一日にかいた手紙。五六日には来るとある。モキの技研転任の事につき、寺沢さんを訪問するところがある。ところが同時についた寺沢夫人のハガキによると、寺沢氏は「計数」をやめてゐるとのこと、きつとなにかおもしろくない原因に基くものらしい。それでは寺沢邸気づけで出したハガキその他はマヅカツタかと思はれるが、まあ仕方がない。不二子さんからも手紙。種子のことは小

諸にゐる友だちにも頼んでくれたとのことである。ゴーゴリの『昔かたぎの地主さん』——こんなものをよみ返し、おいしい食べものゝ事が出て来ると、今の生活との違ひがなほはつきり考へられる。べつに労働をしたわけでもないのに、カラダの筋が方々痛いかんじ。夜は七時半過ぎに床に入つてしまふ。

四月五日 木 晴

空気が冷たいが、空は晴れて美しい日和になつた。早朝藤田の息子が暇乞ひに来る。今日は常会なので方々の窓を明け放ち、掃除もきれいに仕あげる。かうして見るとこの山荘は中々美しい。いつもより遅い朝食をとり、まだ後じまつもしないところへ安倍さんの亮ちゃん来訪。下の軽井沢から今朝の一番についたとの事。パン一片にお茶を御馳走。おヒルの電車で引つ返すとの事で、ちよつと自分の山荘を見に行つたあひだにジャガイモをゆぜ、残りのセリで玉子とちのお汁を拵へておき、彼は持参のベントウで、私はおにぎりを一つむすんで、昼飯をいつしよにすまず。彼は妙子ちゃんと赤ちゃんをこちらへ移すか、それとも妹さんの行つてゐる諏訪の田舎へやるかをきめる前に、こちらの様子を見に来たのである。諏訪の田舎は食べものは十分らしいから、その点ではよいが、こちらへ置いてあるふとん類その他を運ぶ手数が伴ふわけである。亮ちゃんのつとめてゐる文理大も、本郷の物理、数学とともにスワに移転する筈であつたのに、実験の田中氏が、文理大などと一緒は——といひだし、それで物別かれになつた由、田中氏は札つきでもあるが、こんな学者連の了見の狭さは呆れる。常会は十七人参集。桜間さんの美代子ちゃんがお茶の世話をしてくれて万事都合よ

くすむ 田中丸夫人にサバ二片とタドン、金谷夫人にホーレン草といわし乾物二尾貰ふ。山本のばあさん新聞二日―四日までもつて来てくれる。琉球本島にいよ／＼上陸した。千四百隻の船がむらがつて来てゐるとの事故、特攻隊でいくら沈めてもそれで上陸を喰ひとめることは出来ない。それでもまだナントカ中将なるものは、三面で大きな事をいつてゐる。彼らはこんな言葉や表現で人民を失望させる代りに大に勢づける積りらしいが、それが却つて悪結果に今日までなつて来てゐるのである。

金谷夫人の話に、弓子さんは先日荷物のセイリに一寸帰京したところ帰りは窓から乗る始末であつたさうな。これだから私も帰京に二の足をふむのである。

桜間の細君は、手紙などには三輪とあるので、それが本名かと思つてゐたら、金太郎氏はカメ、カメとよぶ。それがいやで、俳名でも三輪としてゐるのであらう。カメでも、亀子と書くのは嫌がられるだらうが、加芽子と書けば相当美しい名前だ。親に貰つたへんな名前をいやがつて、雅号を本名のやうにしてゐる男もずいぶんゐる。

岸野村から金のカンの小包とどく。れいのアラレらしいが、このまへと同じく開けられない。誰か力のある手を持たなければならぬ。

四月六日 金 晴小寒い。

五時ちよつとまへ浅間が大バクハツ。枕の下がドドンと轟ろきとともに突きあがつた。小用に行き、帰つて窓をあけてのぞくと、灰葡萄いろの空に黒い煙が左に向つて流れ、タカツナギの方の空